

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	里地里山の現状把握とモニタリングの推進
手法名	草原保全のための価値認識と共有化ー牧野カルテの取り組みー
主体	阿蘇草原再生協議会・環境省阿蘇自然環境事務所
背景(地域の課題)	畜産等かつて地域の暮らしや生業で活用されることによって維持されてきた阿蘇の草原は、大陸系遺存植物(※)等固有の希少種の宝庫となっている。しかし、産業構造の変化や人口の減少、高齢化の進行に起因して草原の手入れが困難になり、今、全国的にもその維持は厳しい状況となっている。今後は地域内のみにとどまらない保全・再生に向けた取り組みや仕組みが求められる。 ※大陸系遺存植物とは、日本がユーラシア大陸と陸続きであった時代に分布し、日本列島の誕生に伴い取り残されたと考えられている植物。
手法／方策の詳細	阿蘇の草原は、人間による暮らしの営みの中で活用され維持されてきた。資源採取の場として、牛の飼料や肥料などに利用されてきた。しかし戦後、化学肥料や輸入飼料などの普及により草原が利用されなくなった。 一方で、草原は生物多様性の保全や水源涵養・保水の点で大きな機能を有しており、その価値が見直されようとしている。昔は資源採集の場であったが、今は様々なサービスの提供の場として認識する必要がある。 こうした草原の変遷過程や価値を再認識する手法として「牧野カルテ」がある。  ・「牧野カルテ」 お年寄りへの聞き取りなどを通じて牧野の地名や管理の履歴、植生などを調査する。それらの情報をカルテ(※)に記録することで、再生や活用の取り組みを始める前に、対象となる草原の状況を明らかにする。そのことにより草原の価値の再認識や情報の共有化に役立てることができる。現在20か所で行っている。  ※「カルテ」は一般に診療簿であるが、ここでは対象となる草原の管理履歴や植生の変遷、保全活用の状況等の記録簿を意味している。
手法・技術的視点	地名、草原の管理履歴、保全活用の状況等を「カルテ」に記録することにより、現状把握だけでなく、人の暮らしとの関わりなど文化的・社会的側面まで視野に入れたデータの蓄積が可能となり、草原の価値の再認識や幅広い情報の発信等に役立っている。



参考資料	里なびin熊本 (独)農業・食品産業技術総合研究機構上席研究員／阿蘇草原再生協議会 会長 高橋佳孝
------	---